溜池通信 vol.791 **Biweekly Newsletter** *June 28th 2024*

双日総合研究所
吉崎達彦

Contents **********

特集：「もしトラ」の足音と揺れる民主主義政治 1p
＜海外報道ウォッチ＞
選挙のカギを握る「ダブルヘイター」とは何か 7p
＜From the Editor＞ 将棋ファンの熱い日 9p

****

特集：「もしトラ」の足音と揺れる民主主義政治

6 月は選挙の多い月でした。メキシコ、インド、EU 議会、そしてこの後はフランスと英国の総選挙が控えている。しかも選挙の結果が出てから株安に見舞われる事例が多く、いかにも世の中が落ち着かない印象です。2024 年は選挙の当たり年で、最後には大物たる米大統領選挙が控えている。今週は第 1 回テレビ討論会も行われて、バイデン対トランプの「後期高齢者決戦」のディベートを拝聴することとなりました。

今月はプーチン大統領の訪朝も印象に残る出来事でした。中ロ朝といった権威主義国の「悪の枢軸」が関係を強化する中で、しみじみ「民主主義陣営は大丈夫か」と思われてなりません。民主的な選挙で指導者を選ぶ、という今まで当たり前に行われてきたことが、今の時代にはなんと難しくなってしまったのでしょうか？

●今は「時代の転換点」のどのあたりなのか

岸田文雄首相はよく「今は時代の転換点」と口にする。それを聞くたびに筆者は異和感を覚えている。転換点というものは、普通は過ぎてずいぶん経ってから、「ああ、あそこが曲がり角だったのか」と後知恵で気づくものではないだろうか。

「今が転換点」だと最初からわかっていれば、政治指導者の判断はずいぶん楽になるだろうが、そういうことは滅多にないものである。例えば現在は、「自民党政治の転換点」である可能性が高いけれども、当の自民党議員たちがそのことを自覚しているとは思われない。騒ぎの渦中に居る者は、なかなか全体の流れを見通せないものである。

喩えて言えば、初めて通る高速道路でクルマを運転しているときに、「このカーブはどこまで曲がるのか」は分からないことが多い。「カーナビ」という便利なものができる以前は、運転者は文字通り感覚でハンドルを切るしかなかった。限られた情報で判断しなければならない政治のかじ取りも、おそらくは似たようなものであろう。

その上で、現在、**我々が体験している「時代の転換点らしきもの」**を整理すると、以下のようになるのではないか。

1. **パンデミック：**2020 年春から全世界で蔓延。全世界で 800 万人（全人口の 0.1%）の死者を出した。各国政府は大規模な財政出動と金融緩和を行った。
2. **インフレ：**2021 年から「40 年ぶりのインフレ」が欧米を中心に始まったが、中央銀行の対応は遅れ、金融引き締めの発動は翌年からとなった。
3. **戦争**：2022 年 2 月にウクライナ戦争が勃発。西側諸国による対ロ経済制裁もあり、資源・食料価格が高騰した。23 年 10 月にはハマスによる対イスラエル奇襲攻撃もあり、中東情勢の不安も抱えることになった。
4. **選挙**：2024 年は選挙の当たり年である。これまでに台湾、インドネシア、ロシア、インド、メキシコ、EU 議会など多くの大型選挙が行われてきた。この後も多くの選挙が予定されており、11 月には最後の大物「米大統領選挙」が控えている。

ここまでの変化をひとつのストーリーと捉えてみると、**どうやらまだ「続編」がありそうだ**。ドタ勘で言わせてもらえば、せいぜいカーブの「5 合目」に差し掛かったくらいではないか。少なくとも、近い将来の「大団円」を想定することは困難と言えよう。

どうにも嫌な予感がするのは、今年の「選挙」による政治の混乱が、来年以降にさらなる問題を引き起こすのではないかということである。民間部門の人間としては、**2025 年にはまた新たなトラブルが浮かび上がると考えておく**方が良さそうだ。とりあえずはシートベルトを確認し、ハンドルをしっかりと握っていくほかはあるまい。

●G7 でうまく行っているのはイタリアだけ？

今月はイタリアで G7 サミットが行われたが、産経新聞の**「G7 サミット　唯一元気な議長」**という記事を興味深く感じた[1]。おっしゃる通り、支持率が高いのは議長役のイタリアのメローニ首相くらいであり、他の首脳はいずれも青息吐息である。真面目な話、**「来年はもう会えないかもしれないね」**という人が少なくない。

＊　日本：岸田首相は 9 月の自民党総裁選を乗り越えられるのか？
＊　米国：バイデン大統領は 11 月の大統領選挙で再選されるのか？
＊　英国：来週 4 日に行われる総選挙でスナーク首相は下野する公算が高い。
＊　フランス：マクロン大統領は議会を抜き打ち解散したが、結果は「裏目」に出そう。
＊　ドイツ：シュルツ首相の中道左派連合は低支持率に喘ぐ。
＊　カナダ：9 年目のトルードー首相は、来秋までに総選挙に挑む予定。

[1] https://www.sankei.com/article/20240613-PNYZUSFOBVHH5FFJAQVGQ6JODA/?190253

〇近年の G7 サミットの歴史

回	49	48	47	46	45	44
日時	2024 6/13—15	2023 5/19—21	2022 6/26—28	2021 6/11—13	2019 8/25—27	2018 6/8—9
開催場所	プーリア州・伊	広島・日本	エルマウ・独	コーンウェル・英	ビアリッツ・仏	シャルルボワ・加
日	岸田首相	岸田首相（＊）	岸田首相	菅首相	安倍首相	安倍首相
米	バイデン大統領	バイデン大統領	バイデン大統領	バイデン大統領	トランプ大統領	トランプ大統領
英	スナーク首相	スナーク首相	ジョンソン首相	ジョンソン首相（＊）	ジョンソン首相	メイ首相
仏	マクロン大統領	マクロン大統領	マクロン大統領	マクロン大統領	マクロン大統領（＊）	マクロン大統領
独	ショルツ首相	ショルツ首相	ショルツ首相（＊）	メルケル首相	メルケル首相	メルケル首相
伊	メローニ首相（＊）	メローニ首相	ドラギ首相	ドラギ首相	コンテ首相	コンテ首相
加	トルードー首相	トルードー首相	トルードー首相	トルードー首相	トルードー首相	トルードー首相（＊）
EU	フォンデアライエン／ミシェル	フォンデアライエン／ミシェル	フォンデアライエン/ミシェル	フォンデアライエン/ミシェル	ユンケル／トゥスク	ユンケル／トゥスク
経済問題	・AI ・中国の過剰生産問題 ・貿易	・経済安全保障 ・気候エネルギー、食料 ・銀行経営不安	・食料安全保障 ・エネルギーの「脱・ロシア」	・コロナ対策、ワクチン外交 ・自由で公正な貿易	・自由貿易 ・気候変動	・自由貿易
政治問題	・ロシアの凍結資産 ・アフリカ開発	・法の支配に基づく国際秩序 ・グローバルサウスへの関与 ・核軍縮・不拡散	・気候変動への取り組み ・人権デューデリジェンス	・気候変動への取り組み ・民主主義という価値	・イラン核問題 ・ロシア復帰？	・イラン核合意 ・北朝鮮の核、ミサイル
国際情勢	・中東情勢（ガザ、イラン） ・ウクライナ支援	・ウクライナ支援 ・生成AIの進化	・ウクライナ情勢 ・インフレ対策	・パンデミック ・対中関係	・米中貿易戦争 ・日韓関係悪化	・米朝首脳会談
特記事項	・ローマ教皇が出席	・広島から「核なき世界」 ・ゼレンスキー氏出席	・NATO首脳会議の直前	・豪、印、韓、南アを招待 ・東京五輪の開催直前	・ポリスとドナルド	・トランプ大統領の途中退席

G7 サミットは、来年はカナダが議長国となる。そうなると、7 年前の懐かしいあの光景が思い起こされてくる。米国と欧州の亀裂が誰の目にも明らかになった「あの写真」のことだ。以下の写真は、いろんなバージョンが世界を飛び交ったものである。

来年のG7サミット（カナダ）はどうなるのか？
2018年のシャルルボワサミットでは「あの写真」の記憶が…

- 欧州向け鉄鋼関税問題などでメルケル首相など欧州首脳は米国に激しく抗議
- トランプ大統領はG7会合を中座して、米朝首脳会談（シンガポール）へ
- 来年「もしトラ」となった場合、米欧関係は緊張が避けられず
- トランプ氏は「G7へのロシアの復帰」が持論
- そのとき日本外交はどうする？

来年、「もしトラ」が実現することになれば、再び米欧の対立は決定的になるだろう。そのとき日本外交は、両者の間で立ちつくすことになるのではないだろうか。

●ポピュリズム政治は「取扱ご注意」

そんな中でメローニ首相は、今月行われた欧州議会選挙では自らが率いる「イタリアの同胞」が議席を伸ばし、EU 内の新たな中心人物となっている。長らく「異端の極右」と見られてきた 47 歳のシングルマザーは、2022 年の総選挙で政権に就くと意外にも中国やロシアに対して強硬姿勢を採り、EU にも協力的で評価を高めてきたのである。

イタリア政治の成功のかたわらで、英仏はほとんど顔面蒼白といった状態である。フランスでは欧州議会選挙における与党大敗を受けて、エマニュエル・マクロン大統領が解散・総選挙に踏み切った。英国ではリシ・スナーク首相が、選挙の予定を大幅に前倒しした。もともと**予定になかった 2 つの選挙は、いずれも向こう 2 週間以内に行われる**。

6 月 27 日　　**第 1 回大統領候補者討論会**（CNN/ジョージア州）
6 月 30 日　　**フランス総選挙**（第 1 回）
7 月 4 日　　**英国総選挙**→労働党政権誕生の可能性大
7 月 7 日　　**フランス総選挙**（第 2 回）、**東京都知事選挙**
7 月 9-11 日　　**NATO 首脳会議**（ワシントン DC）→岸田首相も参加
7 月 11 日　　NY 地裁がトランプ氏に量刑を宣告←（5/30 有罪判決）
7 月 15-18 日　　**共和党全国大会**（WI/ミルウォーキー）
7 月 24 日　　ネタニヤフ首相が訪米し、米議会合同演説（抗議デモも？）
7 月 26 日～8 月 12 日　パリ夏季五輪大会
8 月 19-22 日　　**民主党全国大会**（IL/シカゴ）

ところが英仏ともにとんでもないことになりそうだ。英国総選挙では保守党の大敗が見込まれていて、スナーク首相自身が選挙区で落選する可能性までである。英国の長い議会制民主主義の歴史の中でも、そんな前例は皆無であるとのこと。

おそらくは労働党が勝利を収めて、キア・スターマー新首相が誕生するだろう。スターマーは戦略家であって、外交は保守党の路線から変えません、Woke（意識高い系）な政策は掲げません、そしてジェレミー・コービン前党首のような左派は追放してしまった。これならもう、安心して労働党に投票できるという算段である。

逆に保守党は、キャメロン首相時代の**2016 年のブレグジット以来のツケを払うことに**なりそうだ。次のテリーザ・メイは EU 離脱交渉に失敗して退陣し、後を継いだボリス・ジョンソンは総選挙では勝ったけれども、コロナ下でのさまざまな不祥事が露見した結果、決定的に国民の信を失ってしまう。

その次のリズ・トラスは、わずか 6 週間で政権の座を降りる。それというのも人気取りで減税政策を宣言したところ、株、国債、通貨（ポンド）というトリプル安を招いてしまったからだ。**保守主義を失った保守党への信頼は地に落ちる**。こうなると、その後を受け継いだスナーク首相が何をやっても虚しいところである。

要は、**「元ポピュリスト」が現実的な中道政治を目指すのは良いのだが、その逆はいけない**。普通の政治家がポピュリスト的なことをやろうとすると、だいたいが碌でもない結果を招いてしまう。とはいえ、このご時勢においては、政治家に対するポピュリズムの誘惑はネタに事欠かないのである。

フランスの総選挙も危ういことになっている。2022 年選挙で与党が過半数割れしていたために、マクロン大統領はどこかで解散のタイミングを狙っていたらしい。**「パリ五輪の後にやるよりは、前にやった方がいい」**というのは、合理的な判断であったのかもしれない。ただしこのギャンブルは裏目に出そうである。

今週末に行われる第 1 回投票では、決選投票に勝ち残るのは極右（国民連合）と極左政党（新人民宣言）の候補者ということになり、与党連合（アンサンブル）が生き残れないかもしれない。こうなると、**1997 年以来の「コアビタシオン」も現実味を帯びてくる**。マクロン氏のレイムダック化は避けられないかもしれない。

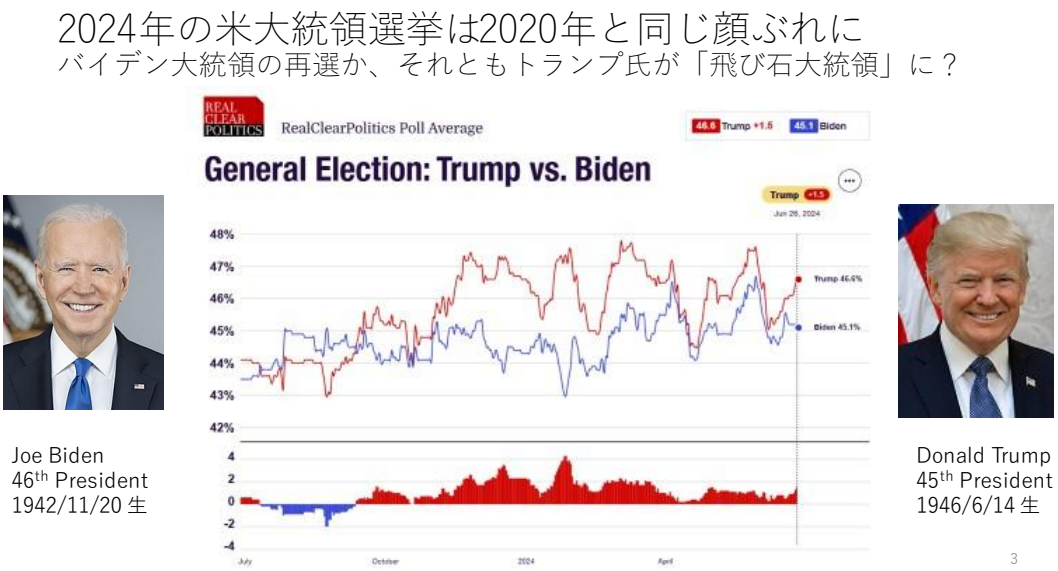
●第 1 回テレビ討論会を見て感じたこと

と、ここまで書いた上で、日本時間 6 月 28 日午前 10 時からの米大統領選「第 1 回テレビ討論会」を見たのである。

ジョー・バイデンとドナルド・トランプ、新旧の大統領は不機嫌な様子で会場に現れ、**お互いに握手を交わすことなくディベートが始まった**。4 年前もそうだったけれども、こういうときは嘘でもいいから互いに敬意を示してもらいたいものである。

トランプ氏はあいかわらずの調子であった。良くも悪くも勢いがあって、4 年前や 8 年前と似たような感じである。しかし NATO に対する評価などになると、支離滅裂なことを言っていて、とてもではないがついていけない。さらに司会者からの問いとまったく無関係の移民問題が止まらなくなったりする。それでも「相手が話している間はマイクを切る」という新ルールは機能していて、**4 年前よりは秩序のある討論会であった**。

他方、バイデン氏は声がかすれていて、最初からいかにも心許ない感じであった。特にトランプ氏が語っている間に、無表情になって不安そうに見える瞬間がいかにも高齢者である。むきになって反論しているのを見ると、思わずホッとしたほどだ。決定的な失策はなかったが、**普通に見た人はトランプ氏が優勢と感じたことだろう**[2]。



[2] テレビ討論会では、「現職大統領は 1 回目のディベートではつい不覚を取る」という法則がある。2012 年のバラク・オバマ大統領でさえ、挑戦者のミット・ロムニーを相手に苦戦したものだ。

今回のテレビ討論会では、バイデン氏のパフォーマンスは死活的に重要だった。今週号の”Washington Watch”誌が、こんな凄いネタを披露していたのである。**この夏は民主党内で「候補者差し替え論」が、もう一度くらい蒸し返される**かもしれない。

「かつてない早期の大統領候補討論会をホワイトハウスが仕掛けた本当の狙いは、**『バイデン大統領を試す』ことにある**。（バイデン氏は）討論会で 1 時間半近く、立ち詰めで、発言要領を書いたメモもなく、トランプ氏と渡り合う。バイデン大統領が知力と体力の限界を試すことになるのは明らかで、そのパフォーマンスが弱く、どう見ても不安感を拭えないなら、新たな大統領候補擁立を考えざるを得なくなるだろう」
（中略）
要するに、大統領側近、選挙参謀は**バイデン大統領が認知力の低下等高齢による心身の衰えを示しているのは否定し難い**と見て、討論会を通じて、バイデン氏が大統領をもう 1 期務めることができるか、大統領職をどこまで困難なくこなしていけるか冷徹に見極めようとしている。

●岸田首相は再選されるのか

低支持率と言えば、わが国の岸田首相もご多分には漏れない。

そこで以下の通り、9 月末に想定される自民党総裁選までの政治日程を考えてみよう。7 月 7 日の東京都知事選の影響は軽微であろうが、同日に行われる **9 つの都議補欠選挙で自民党候補者があまりに苦戦するようなら**、「岸田首相の下では選挙を戦えない」という声が党内で沸き上がる可能性がある。ちょうど 3 年前に、横浜市長選挙における小此木八郎氏の敗北が、菅義偉首相を窮地に追い込んだときと同じような展開である。

もっとも、そのことが判明する 7 月 8 日には故・安倍晋三首相の 3 回忌があり、それが終われば岸田氏はすぐにワシントンへ飛ばなければならない。その後も外交日程が多く詰まっていて、この夏の政局はまことに目まぐるしいことになりそうだ。

もしも岸田氏が再選断念に追い込まれることがあるとしたら、**直接の敗因は今月行われた定額減税だったのではないだろうか**。あれこそは、「普通の政治家が陥るポピュリズムの罠」の典型だと考えるからである。

7 月 7 日	**東京都知事選挙・9 都議補選**
7 月 8 日	**安倍晋三元首相 3 回忌**
7 月 8 日	時事通信、NHK 世論調査
7 月 9-11 日	**NATO 首脳会議**（ワシントン DC）→**日米韓首脳会談**など
7 月 16-18 日	**太平洋島サミット**（東京）
7 月 26 日	パリ五輪開幕（～8 月 11 日閉幕）
7 月 30-31 日	**日銀金融政策決定会合**
8 月上旬	**岸田首相がモンゴル、カザフスタン歴訪**
8 月 15 日	**4-6 月期 GDP 第一次速報**→「デフレ完全脱却宣言」？
8 月末	自民党総務会が総裁選日程を決定
9 月	**自民党総裁選公示**→フルスペック？議員票のみ？
9 月 22-23 日	**国連未来サミット**→岸田首相出席の予定
9 月下旬	**自民党総裁選挙**→岸田氏続投？新総裁誕生？
9 月中	立憲民主党代表選

＜海外報道ウォッチ＞

選挙のカギを握る「ダブルヘイター」とは何か

（観察対象： The Washington Post/ The Cook Political Report）

「ダブルヘイター」と言っても、現下の東京都知事選挙における「白いキツネと緑のタヌキ」のことではない。米大統領選挙において**「トランプは嫌だが、バイデンも勘弁してくれ！」**と嘆いている人たちのことだ。全米有権者の 4 人の 1 人が該当し、彼らを味方につける、あるいは敵に回さないことが、今後の選挙戦のカギを握ると目されている。

たまたま 6 月 23 日の The Washington Post 紙に、**「ダブルヘイターとの出会い」（Meet the 'double haters' who could decide the election）**[3]という滅茶苦茶面白いルポが掲載されていた。激戦州であるウィスコンシン州西部の街ハドソンにおける、60 人以上に対するインタビュー記事だ。**2 人の不人気候補に対する「諦め、落胆、不信感、怒り」は深い**。

＊ 「ゴミ！」「3 億数千万人も居てこれか」「恐ろしい」「どちらの選択も最悪」。4 年前と同じ選択肢について尋ねると、中西部らしからぬ不機嫌な答えが返ってくる。「毎晩、他の誰かが現れることを祈っている」「2 人とも年を取り過ぎている」「ミシェル・オバマの方がバイデンよりもいい」「もっと違う若い血が入って欲しい」

＊ ダブルヘイターは激戦州の結果を左右する可能性があり、両陣営から働きかけを受けている。**若年層、ヒスパニック、黒人、大都市の女性、無宗教**の傾向が強い。ただし彼らの行動は、より少ない悪を選ぶ、棄権する、第三政党を選ぶなどと様々だ。

＊ ハドソンの骨董品店主（55 歳）は、**「スターリンとヒトラーを選ぶようなもの」**と嘆く。彼女の娘（30 歳）は「もっとリベラルな選択肢があれば」と言いつつ、バイデンに投票するという。その婚約者（32 歳）は、「11 月はこれまでで最悪の選択だ」と語る。イスラエル・ガザ戦争が起こるまでは、バイデンは優れた指導者であったと。

＊ **彼らは選挙の天王山だ**。ウィスコンシン州はバイデンが 2.1 万票差でトランプに勝ち、他の候補者には 5.7 万人が投票した。アリゾナ州、ノースカロライナ州、ジョージア州なども、3 位候補の得票数より少ない票差であった。たやすく逆転の可能性がある。彼らの **55%は民主党寄り、45%が共和党寄りなのでバイデンの方が不利**かもしれない。

＊ ほかにも、「鼻をつまんでトランプに投票する」（無党派、63 歳）、「2 人ともに失望した」（共和党員、57 歳）、「ある年齢になれば引退すべきだ」（自営業、39 歳）、「私の世代が松明を渡さないのが残念だ」（民主党員、75 歳）などの声がある。

＊ **トランプ嫌いとバイデン嫌いは質が違う**。前者は人格に対する懸念、後者は年齢や政策に対するものだ。ダブルヘイターは性格上、決断が遅く、最後の最後にならないと決めてくれない。空中戦と地上戦の両方が必要になるだろう、と両陣営は語る。

[3] https://www.washingtonpost.com/politics/2024/06/23/double-haters-biden-trump-deciders/

この「ダブルヘイター」、今年の選挙を左右するバズワードとなりそうだ。誰かが分析しているだろう、と探してみたら、案の定、The Cook Political Report のエイミー・ウォルターが 6 月 21 日分の論考で取り上げていた。**「バイデン離反者とダブルヘイター、彼らを得るのは誰か？」（Defectors and Double-Haters: Who are they? And Who can win them?）**[4]

今年の大統領選挙は 2020 年と同じ候補者なのに、まだ決めていない層が多い。彼らは 3 通りに分類できる。①両方を嫌っているダブルヘイター（25％）、②RFK Jr.の支持者（9％）、③2020 年にバイデンに投票したが、**今回は魅力を感じない若い有権者（離反者＝Defactors）たち**、である。以下は 7 つの激戦州における彼らの調査である。

＊ これら有権者は女性が多く、年齢層が若い。**彼らは経済状況に悲観的**で、トランプ氏の経済政策の方を高く評価している。ただしダブルヘイターはトランプ氏の「気質」を懸念し、逆にバイデン氏は「安心感を与える」人物と思われている。インフレへの不満が強い中で、経済回復が争点になればトランプ氏が優位になるだろう。

＊ 7 激戦州では、2020 年選挙のバイデン票のうち 18％が離反票となりそうだ。彼らは経済と移民問題に関心が高く、中絶問題には関心が低い。今回の選挙をそれほど重視していない点も、バイデンを支持する層との違いである（56％対 83％）。トランプ氏はかならずしも彼らを味方にする必要はなく、棄権してくれればそれで良い。バイデン氏は彼らに対し、景気回復を強調しても効果は薄いだろう。そこで幼少時の苦労体験をアピールする CM を流し、**「共感とつながり」をテーマにしている**。

＊ ダブルヘイターは 7 激戦州の 16％を占める。若い有権者が多く、投票率は低い。ケネディ支持者も多い。彼らも経済情勢に悲観的で、バイデンの政策には否定的だ。かといって、トランプ政権誕生時の景気も楽観していない。彼らは**バイデンの「年齢と職務遂行能力」よりも、トランプの「気質と法律問題」をより懸念**している。

＊ 彼らを味方につけるために、トランプ陣営は経済問題をアピールすればいい。バイデン氏はトランプ嫌いを思い起こさせるように「人格は大事」（Character Matters.）という広告を打っている。今回の選挙は、「有罪判決を受けた犯罪者」と「皆さんのために戦う大統領」の戦いだというメッセージである。

＊ 最後に RFK Jr.支持者は、あまり投票に熱心ではなく、**11 月には棄権の可能性がある**。なお、彼らに「ケネディ支持はトランプを助ける」と言っても効果は期待できない。

充実した図表類も含めて、最近の世論調査はここまでやるのか、という詳細な分析である。「ダブルヘイターと離反者」が今年の選挙の結果を決めるだろうが、**その工夫ができる分だけ、バイデン陣営により「伸び代」がある**と考えることも可能であろう。

[4] https://www.cookpolitical.com/analysis/survey-research/2024-swing-state-project/defectors-and-double-haters-who-are-they-and-who

＜From the Editor＞　将棋ファンの熱い日

先週 6 月 20 日、帰宅途中の電車の中で「あっ、そうだ、今日は叡王戦第５局だ！」と思い出し、日本将棋連盟アプリを開けて観戦しました。２勝２敗で迎えた藤井聡太叡王対挑戦者伊藤匠七段戦の最終局であります。

先手の藤井八冠が角換わりに誘導する。得意中の得意でいわば「鬼に金棒」の戦形。伊藤匠七段は、右玉に構えてチャンスをうかがう。後手番の角換わりによくある戦型だが、すると藤井八冠はするっと穴熊に構えて王を固めてしまう。少しずつ形勢に差をつけていくというお得意のパターンである。

さらに藤井八冠は短い考慮時間で銀を捨て、飛車を捨てて敵陣地に殺到する。この辺まで研究範囲だというのだから、恐れ入るしかない。ところが「終盤力では互角」との定評がある伊藤匠七段はここから粘る。飛車を犠牲にして二枚銀で王を固めて、低い姿勢で立て直したのが良かったらしい。そこから逆襲に転じる。いや、面白い。

伊藤七段は藤井八冠とは同級生の 2002 年生まれ。小学校の時に、藤井少年を破って泣かせてしまったこともある。そういう二人が成人して、将棋プロとなってタイトル戦を戦っている。いやもうドラマとしても出来過ぎである。

ややあって、藤井八冠の AI 評価値が急低下して、素人目にも苦しそうな局面となる。そこから果敢に敵玉に迫り、何度も王手をかける。が、届かない。相手もまた「間違えてくれない」棋士なのである。結局、18 時 32 分に終局でした。あの藤井聡太がタイトル戦で初めて負けたという歴史的瞬間です。八冠独占は通算 254 日間で終わりを告げました。

これから先、藤井七冠が再び勢いを取り戻して「一極体制」に戻るのか、それとも「藤井・伊藤時代」が到来するのか。はたまたベテラン世代の反撃も含めた「戦国時代」となるのか。いや、まったくわかりませんが、ファンとしてはとにかくこれから先も楽しみだというほかありません。

この日、順位戦の B 級 1 組では、羽生善治九段対佐藤康光九段の対局も行われておりました。こちらは 1970 年と 69 年生まれ、日本将棋連盟の現会長と前会長、いわゆる「羽生世代」の両巨頭です。両者の対局はこの日が通算 170 局目で、同一カードの対戦としては中原誠十六世名人と米長邦雄永世棋聖による 187 局に次ぐ歴代第 2 位の記録。いわば 30 年前の「藤井・伊藤」ペア的な存在です。

叡王戦第５局と同じ日に、こんな対局が行われているとは将棋の神様も面白い計らいをするものです。今年は日本将棋連盟の 100 周年[5]。こういうのも伝統の力なのでしょうか。

筆者は指さないで見るだけの「見る将」ですが、小学校時代からですので 1 世紀のうち、約半分だけお付き合いしたことになります。藤井対伊藤戦はいったい何局行われることになるのか。まだまだ楽しませてもらえそうですね。

---

[5] https://shogi100th.com/

＊　次号は 7 月 12 日（金）にお届けいたします。

編集者敬白

―――

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問合わせ等は下記あてにお願します。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル http://www.sojitz-soken.com/
双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945
E-mail: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com